

コレッリ:ヴァイオリンと通奏低音のためのソナタ《ラ・フォリア》

「ラ・フォリア」は、17世紀イタリアの作曲家アルカンジェロ・コレッリが、1700年にローマで出版したヴァイオリン・ソナタ集(作品5)の掉尾を飾る第12番のソナタにつけられた副題。元来「フォリア」は、中世のイベリア半島起源の舞曲の一種だったが、ゆったりとしたテンポで一定の低旋律をともなう舞曲として17世紀に流行した。憂いを帯びた典雅な低音主題にのせて、多彩な変奏が行なわれる。

J.S.バッハ:無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第2番 より シャコンヌ

「シャコンヌ」は、J.S.バッハ《無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第2番》の終楽章(第5楽章)に置かれている。バッハの無伴奏作品のなかでも屈指の名曲であり、単独で取り上げられる機会も多い。

ストラヴィンスキー(ドゥシュキン編):イタリア組曲

原曲は1919~20年、ディアギレフの依頼で書かれたバレエ音楽《プルチネルラ》で、音楽は18世紀イタリアの作曲家ペルゴレージの未発表の楽譜にもとづいている。1932年に《イタリア組曲》としてチェリストのピアティゴルスキーと共同でチェロ版が作られ、翌33年に友人でもあったヴァイオリニストのサミュエル・ドゥシュキンと共同で6曲からなる本組曲(ヴァイオリンとピアノ版)が作られた。